

オリエンテーションは

どうあるべきか

岡田 妙

辞義を越えて オリエンテーションって何のことだろう
と思ひながら、長年この片かなことばを使っている。辞書を見ると、
辞義的には東方、つまりオリエンと関係のあることがわかる。古
代の神殿建築で、東側に祭壇がくるように建物全体の方角を定める
ところからきたらしい。さて、これが「大学新入生のためのオリエ
ンテーション」ということになる、どうも辞義だけでははつきり
しない。「ここが正門、ここが学部事務室、云々」というようなこ
とで、まさか教職員と学生が共通の時間を無駄に使う必要もあるま
い。そこでもっと「しかるべき」やり方ということになると、おの
ずと辞義を越えることになる。ところで現今、辞義以上の解釈につ
いて確たる合意が見つからない。大学側にも、新入生側にも「しか
るべき」方向づけへの千差万別な期待が雑居している。だから、
「期待されるオリエンテーションとは何か」という疑問をみんなが
持つ。

何しろ大学の大衆化に伴って「しかるべき」大学のあり方そのも
のが話題になるくらいであるから、東西南北そのものが確定しない
ままであることが、オリエンテーションにとっては最大の問題点
だ。また同志社がかかげる学園精神にしても、仮にキリスト教主義
とか国際主義とか口では言っても、それが何なのかについて、私な
どはもひとつよく分らない。また、仮にわかったつもりでいても、
学園内のみんなの意見がある程度の一致を見るところまでは
中々行くまい。したがってオリエンテーションは、そういったあら
ゆる不確かさの中における方向づけということになる。船に乗って
いて、毎日水平線上の別の所から天体が登って来れば、一体どちら
が東かわからなくなる。それでも船首はどちらかぐらいのことなら
誰にでも言えるから、多くのオリエンテーションと称するものは、
その種の説明に墮してしまふ。「しかるべき」オリエンテーション
が行われるためにほんとうに必要なことは、自分たちの大学がどん

な性質の所なのか、どんな所になることを志向しているのかについて、ある程度の合意を形作ることである。それがあつた上で、オリエンテーションはいつ、どんな形で行すべきかということになるのだと思う。

入学前の方向づけ オリエンテーションは、時期的なことを言えば、新入生が大学へ入る前と、入った時と、そして入学後との三段階に分けなければいけない。私自身が同志社大学へ入って来る前には、大学側の案内は手続きや書類に関するものばかりであった。その後、留学生として米国とフランスの大学へ入れてもらったが、いずれも入学前の五、六カ月にわたって、いろんな形のオリエンテーションがあつて、大変ありがたく大いに役立ったと思つてゐる。外国留学と国内の大学入学とは話が別だとおっしゃる向きもあるだろうが、それにしても扱いに差があり過ぎた。たとえば、米国の私学では、入学決定前に学生や家族が考慮中の大学を訪ねることがよくある。校舎を見ることはもちろん、食堂で在学生と話をしたり、時には私の住んでいた寮などへそうした学生が数日間寄宿して、寮内の在学生といふ話し合つて帰って行くというようなこともあつた。そうした「訪問客」を大学側も丁寧に遇している。いずれの大学にもパンフレット類がよく整つており、質問にに応じてくれる係の人がおり、希望すれば学内を案内もしてくれる。学生が交替で案内役をつとめている所もある。そうした応待ぶりを見ると、ほんとうにこの大学へ来てみたいと思う人に、一人でも多く来てもらおうという、大学側の意図がよく伝わってくる。もちろん米国にも全米大学の下馬評を電話帳のように集めた出版物もあるが、そうした

甚^{ちまた}の情報源とは別個に、大学独自の情報が提供されている。日本は確かに国状が違う。しかし日本の実情に合わせた入学前のオリエンテーションはもっと盛んにするべきだ。たとえば自分の専門分野について、本人も親御さんも正しい理解をしないままで入学して、入学後にどうしてもその分野になじめない、などというケースは、事前の一つでも防げるよう、方策を練る責任の一端が大学側にも、高校側にも、また広く出版界やマスコミのような所にもあるのではないか。残念ながら現状では、専ら入試という仕組みの力に押され放しの感じであつて、そのために犠牲になつてゐるのは受験生ばかりではない。大学や各学部だつて大いにその個性を踏みにじられてゐる。私学が私学らしくあるためには、もっと大学独自の意志や方向づけが力を持つようにして行かねばならない。

入学時の方向づけ 入学時のオリエンテーションは、大学として最も経験を重ねてきた部分であるから、オリエンテーションといへばたいいてい、俗にオリエンなどというこの部分のみを指すくらいになつてゐる。旅先でホテルなどへ投宿したつて、最初は案内してもらわないと分からないのであるから、ましてやマンモス大学へ入つた時にオリエンが必要なのは論をまたない。私自身は、同志社大学の他に海外で、夏期大学のようなものを含めると八つの、いずれも大きな大学へ通つたが、どんなに親かなオリエンがあつても、なおかつ入学時の二週間くらいは相当な身心の負担であつた。五度目なら平気、などというわけには行かない。新入生の立場はその都度身にしてみ分かる気がしたが、さて自分が受け入れ側に回つてみると、一体どう手助けしてよいかさっぱり分からない。入社して十数



オリエンテーション期間中の大学キャンパス

年、海外にいる時以外は必ず学内のどこかでオリエン関係を手伝ってきた。それぞれの部署に、さすがと思われる経験の集積があつて、年々細部が改良されて行く姿を見てみると、やっぱりこれしかない、と毎年のように思うのである。どこかの私学でやっている、温泉につかりながら教職員と学生が知り合う、などという奇抜なことも含めて、試行錯誤と経験の集積と、そして新入生の忍耐と努力、それらを持ち寄ることによって行くしかない。そこにはおのずとお国ぶりや国民性や特定大学の風習が発揮される。それでよい、というより、そこが大変おもしろいところだ。はじめての大学での手続き期

間は、在学中で特に情報豊かな部分である。しかもその情報は、到底口伝えに教えられることのあり得ない性質のものが多く、しかも大学側は全く意図しない種類のものなのではないかと思う。たとえば、「お国ぶり」といったようなものは、留学生にとっては重大な文化的内容を含んでいる。その点ではいわゆる学風なども同じだと思う。つまり、これからここで教年を過ごそうとする者にとってはこれは生活のよりどころみたいなものである。留学生の場合には大抵、お国ぶりの説明のようなものが与えられる。また本学でも学風らしきものについてひとくさりの説明はどこかで必ず行われている。しかしそうした意識的、意図的説明より、新入者にとってはるかに情報豊かなのは、実は人間の無意識部分、つまり教職員がどんな風に登録手続きの処理をしているかとか、何ヶ所の事務室をどんな風にかけて回り廻ってそれぞれの場所であつたことなど起こるかなど、オリエンのいわば枝葉末節部分に多くの得難い情報がある。新入者は、そうした何でもない仕事ややりとりとに接することで、自分が一体どんな所へ入って来たのかを体得するものだと私は思っている。もちろん手続き等はどこの大学だって簡便化しようと思いつけているし、内容に富んだオリエン・プログラムを練ることも大切だとは思ふ。そうした努力の結果には、いやでも日本人らしい癖や、京都風な物のやり方や、同志社型の発想や、そんなものが個々人の人柄とまじり合つて難然と現れるのではないだろうか。恐らく大学側も新入生側も、この情報部分をあまり意識はしない。にもかかわらず、そして、だからこそ、この部分から得られる学風といったようなものの感触は、意外と強烈で、抜き難い。

そして入学後 問題はむしろ、いよいよ新入生が教場へ入った後のオリエンテーションというか、それはもはやオリエンテーションとは呼ばないのであれば、アフタ・ケアとでもいうか、その部分が現状ではまだ不十分なのではないか、ということである。現状の大学は、その課程全体が人間として、同志社人として、また一般知識人としての方向づけの場である。その意味では、オリエンテーションは、卒業するまで続くものと考えなければいけない。もちろんこ

新入生の受け入れをどうするか

女子大学のオリエンテーション

——変遷と課題——

国・公・私立を問わず、日本の大学はここ約十年来、新入生オリエンテーションの行事に大同小異のある程度共通した型をもっている。各大学の教育について理解させ、学生生活を有意義に過ごさせるために、教育の目的や内容を解説し、諸部課の業務手続き等を説明し、さらに、主として学生自治会から学生団体や課外活動についての情報が提供される。そして、学生が良い友人、先輩、教師を得て、新しい目標を見出し、それを目ざしての自己形成の計画をど

んなことは今更いうまでもないことで、すでに学内の学科目や必修小クラス科目の編成・運営や、その他学業以外のいろんな形で、アフタ・ケアのための数々の配慮がなされてきた。それでもなお、今後努力を結集することが最も必要なのはこの部分、つまり在学生の方向づけへの指導であると思われる。しかしこれは、当面の話題の域を越えているので、単なる言及にとどめることにする。

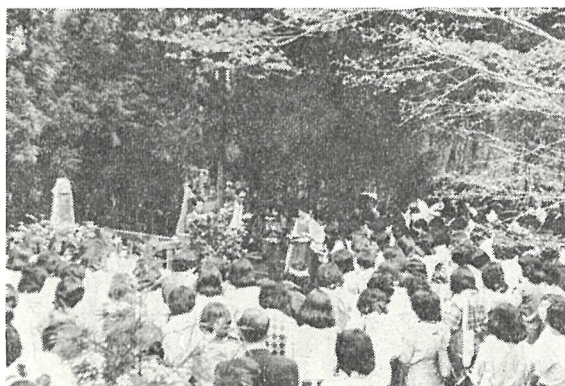
(大学経済学部助教授・英語)

久保 貞子

のように立てるかにオリエンテーションの大きな比重が置かれる。なかでも、各私立大学は、建学の精神に基づく教育の目的をもち、学生への教育理解のためにはその伝統や特色に重点が置かれることは当然である。同志社女子大学は新入生の受け入れをどのようにしてきたか、しているかについて、諸種の行事の中から特徴的なものを選び述べることにする。

学生生活のしおり

同志社女子大学の入学試験合格者は、入学前に「学生生活のしおり」という小冊子を郵送で受け取る。これは一九六〇年から、当時の学生課長、中村 貢教授の発案によって始められたもので、同じく同教授の創作による、一教師と一新入学生との対談形式をとった学生生活の手引きである。同志社について、キリスト教による教育について、同志社女子大学とは？ リベラル・アーツについて、入学当初の諸行事、学内の事務機構、アドヴァイザー、カウンセラー制度、学生生活等についての記事が懇切に、しかも興味深くまとめられていたので、以来、状況の変化に応じて少しずつ修正されて現在に至っている。当初のものは二十五頁にすぎなかったが、近年は約六十頁にもなり、内容も対談形式による大学生生活の



新入生校祖墓参

案内のほか、学長の巻頭言、数名の教授による論評等が加えられて、量質ともに一段の充実がみられる。この「しおり」は、入学者のオリエンテーションは入学式をもって始まるものではなく、入学前に時宜を得て学生との接触を図り、新しい大学生生活にのぞむ備えを、との願いからである。

プラー・デー “Play Day”

一九五三年から約二十年間続けられた全学的な新入生歓迎の行事で、バス旅行、ハイキング等を主としたもので、企画・実行は学生会の委員が中心となり、学生課が学生の相談にのり、助言に当たった。学生の約八十%、教職員側も七十%見当の参加があり、二十台に近いバスを運らねての全学旅行は壮観であった。車中や目的地では、委員学生による司会・指導で、歌、ゲーム、教師紹介、ダンス、スポーツ等のプログラムが進められ、新入生たちは上級学生の巧みなリード振りに感心したり、教師方のぎこちないダンスに、「大学の先生」の思いがけない一面を発見したりして、最初の不安や緊張もほぐれた。学生数の増加、交通事情の悪化等のために校外に出ることが困難になり、一九六八年からは学内での講演、課外活動、クラブ紹介、クラスの集い、という形に変わった。これは現在も講演は大学主催のものとして、クラブ紹介、クラスの集いは学生会の行事として、オリエンテーション・プログラムに組まれているが、「プラー・デー」という名称は、記録によると一九七一年まで用いられたことになっている。

フレッシュマン・アセンブリー“Freshman Assembly”

これは新入学生十数名に専任教員一名を割り当て、教師と学生、学生同志の個人的接触に重点を置いて、学生の大学生活への適応を助けることを主な目的とする制度である。これについては、現在に至った経過をたどる必要がある。本学には一九四九年の創設以来、一九七一年度まで「人間関係」という、一般教育にも専門教育にも属さない教科が置かれていた。それは、リベラル・アーツ・カレッジとしての本学独特のもので、第一学年（一九五六年度からは第四学年にも課す）の必修科目で、講義と討論の二本立てになっていて、人間理解を目的とした総合科目の性格をもったものであった。討論クラスは、学生を二十名以下の小人数に限り、担当教師の助言のもとで、主として学生の自主的運営により、「自分にとって大学とは何か」「教養について」「友情について」「読書について」「課外活動について」「男女の交際」等の議題をとりあげて行われた。一九五六年以降は第一学年（前期）に対して「大学生活への適応」を、第四学年（後期）に対して「社会生活への適応」を主題として、新入生のためにはオリエンテーション・コースとしての性格を明確にした。同志社教育の理解、教師と学



クラブ勧誘風景

生、学生同志の個人的接触、学生の自主的思考や集団思考の訓練等にある程度の成果を収めた。しかし、その後学生数の増加に伴い、当初三名の担当教師を十名以上に増加しなければならなくなり、教科専任教師の退職後、その補充のないうまま、一般教育関係の教員が、各自の専門教科担当のかたわら、もつこととなった。目標、内容、方法、評価基準等についての共通理解を得ることが次第に困難となり、一方、専門教育の比重が増加してゆく過程のなかで、ついに廃止のやむなきに至った。その主旨を残すため、一九七二、三年に置かれたのがテュートリアル（Tutorial）制度である。これは新入学生を十数名の小グループに分けて、それに一名ずつの専任教員を当て、第一学年の前期のみに、一週、一講時分の時間を組み、担当教師が自由に授業、集会、合宿等を行うというものであった。わずか二年で廃止となり、一九七四年には“You & I”という制度が試みられた。これは十数名の新入生に対して一名の専任教師を当て、オリエンテーション期間中に、共に茶菓をとりながらの懇談を通して親交のきっかけをつくらうといったものであった。これにつづいたのが現在のフレッシュマン・アセンブリーである。これは一九七五年から本年度三年目であるが、オリエンテーション期間中の所定の時日、場所におけ

最初の会合のあとは、担当教師の自由裁量で行う。年に二回の行事分として、大学より一グループに対し一万円が支給され、前・後期一回ずつの見当で学内・外の会食、読書会、ハイキング、散策等が、主に学生の自主的企画、運営によってなされている。教師のグループ配当に教科担当が関係していいので、相互の接触の機会が少なく、形式的に終わってしまう難点もないではない。さし当っては教員の割り当て、アドヴァイザー制度との関連等を検討しなければならぬし、将来これを教養ゼミナールに発展させることも一考すべき今後の課題と思う。

ビッグ・シスター リトル・シスター “Big Sister & Little Sister”

これは、一九五七年より現在まで二十年間続いている、大学委嘱による上級学生の下級学生に対する、入学時に重点をおいた補導、助言の活動である。(詳細は、本誌第十六号に谷川和子元学生主事によるものが掲載) 学生数の増加に伴って、大学生活への適応のためには最良の条件に恵まれた学寮に入居を望みながら、下宿生活を余儀なくされる新入生が増え、不慣れな土地での生活の不安や緊張を解消するために、「お姉さん」格の上級生が下級生の相談役に当たるといった、言わば学生カウンセラー制度である。一九六四、五年頃を頂点として活発な活動が見られたが、学生の意識の変化、学生課の業務量の増加等の事情により、近年やや低調であるが、学生に対するきめ細かい対応をモットーの一つにしている本学として、新しい時代に即したあり方を求めてゆかなければならない。

その他、オリエンテーション期間中の主な行事として、カレシ

ング指導、校祖墓参、映画「同志社百年」の上映等があり、さらに前期授業開始後夏期休暇までの特別礼拝期間や、五月下旬の一泊二日の「春の修養会」もオリエンテーションとしての意味をもった重要なものである。

以上の諸行事、制度、活動を通して、本学新入生受け入れのために、同志社教育の理解、教職員と学生及び学生同志の有機的な関係、学生に対する懇切な対応に留意し、努力してきたことが多少ご理解いただけたかと思う。しかし、我々教職に当たるものが注意すべきことは、伝統化し、制度化したものの内容と方法の吟味である。オリエンテーションが、大学の重要な教育活動の一つであるとの理解に立つならば、それは、入学式後の数日間の、「行事プログラムをどうするか?」といったことで簡単にすむ問題ではない。先年の大学紛争の際、「大学のあり方」が厳しく問われて後、しばらく各大学は改革案の作成に努力した。しかしその後、抜本的改革が実施された例は極めて少ない。そして、我々が受け入れる学生の意識も、我々をとりまく社会状況も急速に変化してきている。学生に決して迎合することはないが、彼らが何を求め、何を考えているかを適確に把握しないで教育はあり得ない。オリエンテーションは、当然、「大学のあり方」全般にかかわってくる問題で、本学は一九七〇年代も終わりに近い十八歳から二十二歳の女子学生を、百年前(一八七七年女子部創立)に新島先生が意願された、「温容にして而も不正なることに悲憤慷慨し、男子に従属せず独立する女性」に育てているか否か、本学の教育の目標、内容、方法が、今一度原点に立つて厳しく問われなければならない。

(女子大学教授・社会学)

新入生の受け入れをどうするか

高等学校の実状と課題

上田 堅一郎

新入生に対し学校の教育方針を十分に理解させ、またできるだけ早く学校になじませるために、高校ではどのようなオリエンテーションをしているか。と問われても、他の学校に比べて特別に変わった行事をしているわけでもないし、また、凝った計画を持っているわけではありません。ごくありきたりのことを、ごくありきたりの方法で行っているに過ぎません。入学式の終わった後、新入生とその父兄に対し、高等学校における学校生活全般についての心得とか進級や進学等について知悉しておかなければならない事柄などを、補導部主任と教務主任が壇上から説明すること。また、新入生たちが日常の学校生活において出くわすさまざまな事柄に対し、とまどわず対処できるように、ホームルームの担当によって更に細かい指導をすること。もろもろの規則やスケジュールを刷り込んだ生徒手帳や、図書館利用の手びきといったたぐいのパンフレットなど配布すること等等。また、生徒会の方でも、新入生を一堂に集め、約二時間程にわたって、三十分くつある運動部や学芸部がそれぞれの

クラブの紹介(宣伝?)をするのが慣例になっていますが、これも、どの学校でも見られる風景でしょう。ただ一つ、同志社らしいオリエンテーションの行事としては、若王子の校祖墓参が挙げられます。もちろん、同志社の学園内では、どの学校も行っている行事であり、ことさらに云々する程のことではありませんが、一般の学校と比べればやはり特筆される行事と言ってよいでしょう。生徒たちに、百年の歴史と伝統をもつ同志社というものを肌で感じさせる場所としては、ここ以外にはないという気がいたします。

以上が、高校における学年当初のいわゆるオリエンテーションの行事の概略ですが、オリエンテーションという言葉が、方向づけという意味であるとするならば、新入生に対する最初の、そして最も中心的なオリエンテーションは、入学式において校長や総長によってなされる式辞であると思います。私をはじめ同志社高校に就職した年に、新入生と共に列席した入学式において、当時の総長であった湯浅先生が、「同志社における生徒の評価は、その生徒の能力

の多寡に対してされるのではなく、自分に与えられた能力をどれだけ發揮し得たかということに対してなされるのである。」といった主旨の式辞を述べられたのを、非常な感動を覚えながら聞いたことを思い出します。

ところで、学校として、新入生に対してどのようなオリエンテーションをしたとしても、新入生の側に立つた場合、学校からのオリエンテーションのほかに、上級生から意識的に、また知らず識らずの間にさまざまなオリエンテーションを受けています。それが学校のオリエンテーションの不足を補うものであればなほだ結構なのですが、えてして学校のオリエンテーションの効果を希薄にさせるようなことが行われがちです。新入生に対し、どれだけ理想的なオリエンテーションをしたとしても、上級生の現実がその通りになつていない場合には、日ならずしてそのオリエンテーションの効果はなくなつてしまふでしょう。特に本校の場合、大部分の生徒が同志社中学校の出身ですから、そのような上級生からのオリエンテーションを非常に受け易い状況にあります。従つてオリエンテーションは単に新入生に対する学年始めの指導や、行事としてではなく、全校生徒に対する、いわば教育全体の問題として捉える必要があると思います。

さらに、高校の場合は、入学してくる生徒が同志社中学校と同志社外の中学校の両方からなので、そのことから生じる問題について触れたいと思います。第一は、同志社中学校からの生徒とそれ以外の中学校からの生徒との交流の問題です。受験勉強に悩まされずに非常にのびのびと教育されてきた生徒たちと、その反対に、受験勉

強に必死に取り組んでやつと合格した生徒たちとの間に、意識の差ができるのは当然で、むしろそのように異なつた環境で教育された生徒たちが積極的に交わることによって、お互いが啓発され、高め合うことになれば、まことに理想的なのですが、現在のように外部中学校からの生徒の数が少なくなつてくると、自然的な状態のままでは、到底、そのような交流は望めないばかりではなく、その生徒の性格によっては、クラスの中で全く孤立してしまうといった状況が生じがちです。外部中学校からの生徒の数が、全生徒の少なくとも二割、欲を言えば三割程度もいれば、この問題はかなり解消すると思うのですが、それが望めぬとなれば、この問題は、オリエンテーションの今後の重要な一つの課題として考えてゆかなければならないと思います。

第二は、同志社中学校からの生徒と外部中学校からの生徒との学力差の問題です。受験勉強を必要としない同志社中学校からの生徒の中には、特に英語や数学において弱い人のいることは、ある程度やむを得ないことも知れません。また、みんな素質は十分にあるはずなので、新しい学校へ入つたという自覚をもつて勉強してくれば、多少の学力差は問題にはならないのですが、その自覚がないと、中学校に比べて進度も早く、量もずっと多い高校での勉強に耐え切れぬようになり、入学当初の学力差が決定的な結果を生むことになつてしまします。どうすればそのような自覚を促すことができるかということは大変難しい問題ですが、これもオリエンテーションの課題の一つとして研究しなければならない問題であると思います。

(高等学校教諭・教頭)